

ランチ・タイム

荒 木 都

(B・G)

毎日のお弁当に飽きた時、お友達を誘って何処にでもあるありふれた店でなく静かな雰囲気の中で落着いたランチ・タイムを楽しむ様にしています。柳筋を入って山側に移転した「山田の楽山子」民芸調の店。スタンド式のテーブルランチタイムを楽しむB・Gや会社員でにぎわっています。ランチタイムは11時半から2時迄串カツ定食はご飯、味噌汁、漬物串が4本、これは豚一、野菜二、魚一の割合で一〇〇円。串カツご飯は串ものが5本で二〇〇円也。のり茶漬が一〇〇円。季節の魚や野菜で献立が楽しい。追加注文も

O・K。3月頃はかきがおいしい夏にはピーマン、茄子のミンチ詰等が珍しい。夜は恋人達が気軽にビールやお酒をそえていっそう楽しそうにお食事をしています。朝日会館ビル地下のつきあたりにもそばのお店「一茶亭」があります。こもゆつたりとしたスペースを取った民芸調の店、間口を入った右側にはへつまつ、みがかれた釜の中にはおいしいお茶が入っている。黒ねりの店内をしきった真中のたなには放香鍋が並び茶店方の椅子には真つ白いお座布団がとても清潔で気持ちいい。めん類の好きな私達は月見そば八〇円等でランチに変えます。そばの放香鍋が四〇〇円。外人の愛舌家も多く商談等の食事にもおすすめ出来ます。

寿司

三

福

三宮阪急東山側
TEL ③2456

ステーキ

み その

神戸生田神社前
東京田村町3

西洋御料理
シャブ、シャブ
オイル焼

もん

ハナワグリル

元町5丁目
(モダン寺高架浜側)
TEL ④六九四二・五九一

朝鮮料理

金剛山

神戸・三宮・生田神社前
TEL代 ③5561

バーベキュー

コーベガーデン

市役所前東入る
TEL ②4400

パウリスタ

三宮トアロード
TEL ③1362

鰻・蒲焼・日本料理

竹葉亭

三宮阪急西隣
TEL ③1120
1140

神戸うまいもん巡礼

No. ⑦

赤尾 兜子

西洋料理の巻

いかにも神戸らしい店、料理のうまいのは、もちろんちよつと外国へいつているようなフンイキをただよわせている店はないものかと考えていたところ神戸市庁舎の真向にある「テキサス・ターバン」がふと記憶によみがえった。

久しぶりに店をのぞいてみたが、やはりそこにはエキゾチシズムが流れていた。黒い色調につつまれた店の中には、商談や談笑をしている外人のカップル、若いアメリカ海兵の姿もあったが、日本の飲食店のようなガヤガヤがなく、みんな落着いてまったく楽しそうに美味を食べている。店名は、テキサスの居酒屋という意味だが、日本流の居酒屋の常識とはおよそちがって品がよい。何しろアメリカ料理は、すべてに量が豊富なので、多くに手が出ず店の看板にしている「フロッグ・レッグ」を賞味した。「フロッグ・レッグ」とは蛙の脚のことで、それをフライにした料理。

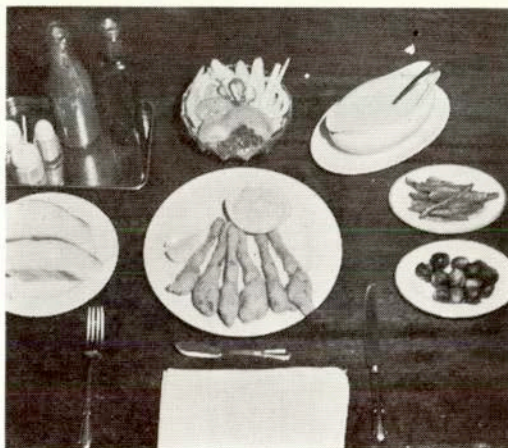
料理としては、ややゲテモノの部に類するかもしれないが、まことに珍味である。蛙の上半身をすてて、その脚だけをフライにしたところ、見た目には、ころもがうす茶色にこんがりあがつて、蛙の無気味な姿など全然ない。とても柔らかく、若鶏のモモ肉に似た味でもあり、いくぶん牡蠣(かき)のような快い味が味もあって、や

はり他の代用を許さない特異なものとみた。タルタルソース、ケチャップ、マヨネーズ、ドレッシングの四つが卓にそろえてあり、お好みによって、そのいづれか好きなものをつけて食べるのだが、そのなかでは、レモンをしぼってかけ、塩をつけて食べるのがいちばん味がきまっていたと思った。野菜サラダ、パンをつけて一〇〇〇円。関西でこの料理はこの店しかできない。輸出用に四国などで養殖している食用蛙に、塩と黒コショウで味をつけ、それをフライにあげるのだが、ころもにはフレッシユのパン粉と、オイルでのばした卵の黄味をまぶし、いっさい水を使わず、うまく骨まで火を通す火加減はやはりしろうとの手では無理である。三月から九月までは生きた蛙を、それ以外の期間は、冷凍ものをもどして使うから、年中できる料理である。

この店は、元米軍人だったハロルド・ウッズさん(バージニア州出身)が、神戸でコーヒ店をやり、十年前転向して開いたが、アメリカとメキシコふうの家庭料理を客のお好みに合わせて作るのを信条にしている。というわけで、メニューは、ビフステーキからサンドイッチにいたるまで豊富にそろっているから、はっきりお好みをいつて作ってもらえばよい。客の九十パーセントは外人だが、日本人を敬遠しているわけではなく、この店の特

長を知る人は、京都、大阪からも足を運んでいる。もつとも帽子をつけたままずかずか入ったりすると、誰も応待してくれないから、レストランの入るエチケットだけは、お忘れにならないように……。

すこし趣向をかえて、こんどはインドネシア料理とゆく。洋菓子で知られたベル（三ノ宮センター街）のグリルにある。このところ、かなり知られてきたようだが、「ナシゴレン」というのがそれだ。ナシとはめし、ゴレンというのは油でいためるという意味、つまりインドネ

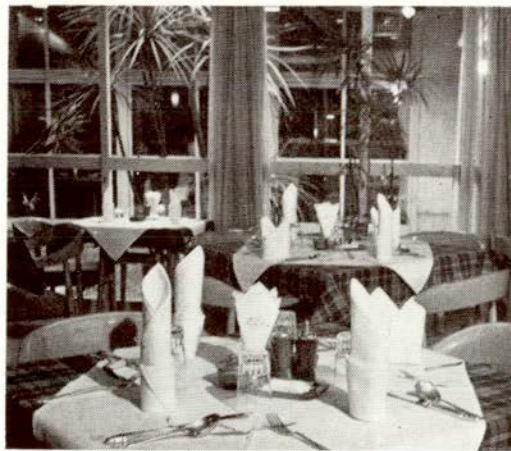


「テキサス・ターバン」のフロッグ・レッグ ¥1,000

シアの焼飯というところ。インドネシアは暑い国、料理は辛味が強く、香辛料をふんだんに使い、必ず油を加えているのが常識、しかもあちらでは、指でつかんで食べるのだが、この料理は、もちろん日本人向にしてフォークもちゃんとそろえてある。

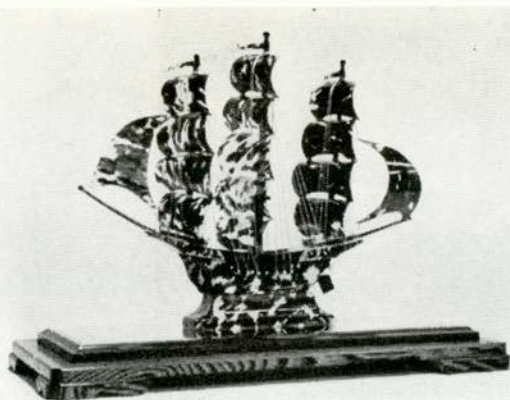
大皿にレバーの油いため、牛肉、チキンの串焼き、ミンチ肉、玉ねぎのオムレツなどを盛りつけ、別皿に玉シニク、シバエビ、ニラで味つけた中国ふる。受け皿にこの焼飯をとり、大皿のい

ろいろの肉類をとってのせ、ソースをかけて食べるというぐあいである。ソースはトウガラシ、ピーナッツトンカツの三種、すきなようにソースをえらばよいがトウガラシをコンソメでうすめたトウガラシソースのびりりとした辛さにもっとも本場の味がしのべる。皿にそえてあるタピオカを原料にしたえびせんべいは南方の直輸入ということだが、食事の合間につまむのに絶好だ。三〇〇円、サラダ、魚のからあげなどをつけたスペシャルは五〇〇円。



静かな雰囲気のあるベルの店内

この店、西久保コック長がインドネシア領事館から現地料理を勉強するなど熱心なせいもあってか、若鶏をクリームで煮こんだチキン・アラキング（三五〇円、バターライスつき）六種の薬味をつけたゴア風カレーライス（三〇〇円）といったメニューも出し、こんどさらに新メニューを加えるようすで、気の向く人は、そうした新しいメニューに舌を当ててみるのも悪くないだろう。



センスあふれる

べつ甲の専門店

元町一丁目

太田鼈甲店

TEL ③ 6195



春の
贈りものの
かずかずが
整いました



元町2丁目 TEL ③4707~4708

YE AULD SHIRT SHOPPE



よろず御襯衣仕立處

神戸シャツ

神戸大丸前 TEL ③2168



KIKUHIDE

贈って喜ばれ
もらって重宝



菊秀の家庭用品

COOKING KNIFE・御料理庖丁

SCISSORS・裁縫鉄

TOOLS・大工道具と工具

SOLINGEN 製鉄及びナイフ

STAINLESS STEER TABLE-WARE

ステンレス食器

VACUUM BOTTLE・魔法ビン

LOCK & HARD-WARE・錠とカーテンレール

RAZOR・世界の電気剃刀・安全剃刀

神戸・元町2丁目山側

TEL KOBE ③ 0276 ③ 0892



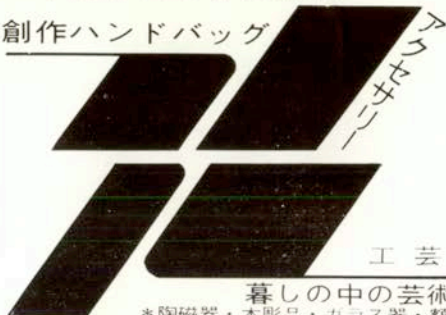
ハイセンスの紳士服で
最高のオシャレを

元町4丁目

三恵洋服店

TEL ④ 7290

ハイセンスでまとめた
創作ハンドバッグ



工芸品

暮らしの中の芸術品

*陶磁器・木彫品・ガラス器・類など

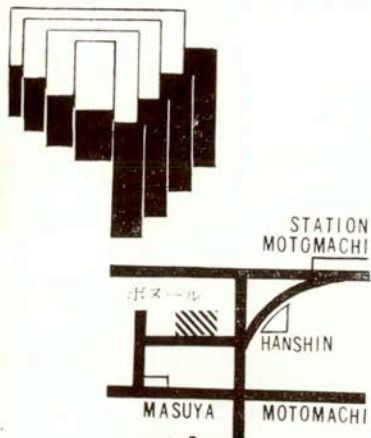
元町一丁目



イクシマヤ

TEL ③ 2415・2416

ご結婚祝 / ご卒業記念品 / ゴルフ賞品



ボナル 美容院

MOTOMACHI KOBE TEL (39) 1176・1348



長崎堂本店

おくりものに
風味豊かなカステラ

本店7—4402元町4—4130
神戸新聞会館秀品店・阪急



ハイセンスで
さわやかな
紳士のおしゃれ

男子洋品の店
神戸屋
元町2・TEL(32589)



高級紳士服専門店
神戸テラー

オーダーメイド・イージー
オーダー・レディメイド
生田区北長狭通2
(省線高架通50)③2817



アクセサリーの店
神戸店・トアロード③2293
大阪店・
心斎橋ロビー (211) 1044

芸 い む 夢



絹屋 化粧品店

西店・三宮柳筋③5778 / 本店・甲南本通③0250

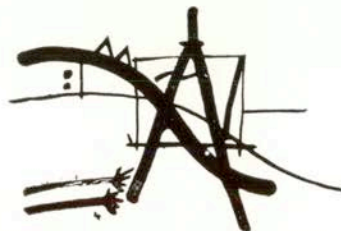


フランス菓子 **ドック**

三宮・センター街 電 ③ 1750

芦屋店・サンドウィッチパーラー
そごう店・姫路店・大阪店

額縁絵画・洋画材料
室内工芸品



末積製額

三宮・大丸北
トア・ロード
③ 1309・6234

春



流行のトップをお知らせする

メンズショップ **千穂庵**

神戸元町四丁目 TEL ④ 6959

新しいセンス、フランス調の
ヘヤースタイル

美容室

あきら

西野 明

御電話の御予約いたしております

三宮本通り TEL ③ 4461・6458

神戸のこと

手当り次第

淀川 長治
え・松本 宏



東京に移って二〇余年。けれども家の墓はいまもって須磨寺の墓
地にある。青葉美しいあの須磨こそは愛するというよりも私にはお
くに自慢の誇りである。だからその須磨に眠る祖先を東京のモダン
墓地に移す気はもうとうない。

大正末期の須磨にはさびというものがあつた。豊かさがあつた。
よく私はそのあたりが好きで散歩した。そして屋敷地の邸宅の欽門
を覗き、生け垣から身をのぼしては溜息をついた。「ここが××の
別荘」「これが〇〇の御本宅」などと覗き歩いて、つい足もともう
ち忘れ、思わず牛のウンコを踏みつけて「あっ、きたな、ばば踏ん
だ」と苦笑した。

二月十日づけの朝日・日曜版に（旅）という頁があつて、そこに（須磨・明石）が大きく紹介されていた。これによると月見山の武庫離宮が戦災で焼け失せて、そのあとが近く公園になると記されていた。あの月見山の離宮が。私は思わず溜息が出た。

三中時代、Sという親友がいた。ある日、遊びに来いという。なにをして遊ぼうときくと、ウンウチの庭で遊ぼうと云う。なんやこの年をしてママゴトでもあるまいし……私はブンとした。

さて約束のその日、当時の宇治電の月見山で下車し、夏の初めのこととてすこし汗ばんで、やっと彼の家のその指定の勝手口の門を見つけ、ベルを押した。するとすでに待ちかねた彼はすつとんで来た。それから二人は家にも上らないでその足で、たきの露地を抜けて庭に出た。

その瞬間、私は暗室からとび出て青空を見たほどの驚きを受けた。いったい、これが個人の私有する庭かと目をうたぐった。

はるかなる芝生の丘の上に見るおも屋のすばらしさ、それよりもその丘から見渡せる大きな池に、少年の私はアツと声立てた。静まりかえったその池には夏雲が白影を落し、遠く池の向うはうっそうたる松林となっている。

それからというものは週三回、私はSのこの庭をわが遊び場として通いつめた。駒下駄つかけ池までかけ下りると、蘆のしげみに一艘の屋形船。Sがパンツ一枚でろをこいでくれる。池の真ん中に出る。錨を下ろす。ザブンととびこむ。疲れると船の中の二畳の小部屋でひる寝もする。

その池の青く妖しい水底は水藻がゆれて底ふかく、何百匹と放した鯉の行方もたちまち消えてあとかたもない。その水遊びに飽きるとおも屋にもどる。するとSが、お前、どっちの風呂が好きやという。二階は西洋風呂。下には日本風呂。私はその木の香りの嗅げる日本風呂が好きで、いつも水泳のあとはその風呂に首までつかり、音ひとつせぬシンと静まりかえったその昼間の風呂の、みかげ石敷きつめた人口の岩くぼにトロリトロリと竹筒から四六時中注ぐ水音に聞き入った。その清水は裏山の道ひとつへだてた離宮からの流

れをくみ入れたのであった。

月見山はその名のとおり実にこの山の手から見渡すと月見に見事であった。遠く海に映えた月が銀河そのまま海一面に輝いて、その海の月と、見上げる空の月、この二つの月の光りがまるで鏡中の魔法絵のように美しい。ところがSの家から眺めると、その月は、海に映え、池に落ち、天上に輝いて、三つの月が一目にその光りを集め、夏の夜の夢を現実にして、その美しさたえようもない。

そんな月夜には、池で泊れよとSが云う。屋形船に岐阜提燈、ふとん、かや、夜食の一さいを持ちこんで、月一色の池の上に一夜を泊り明かす。やがて、きつい夏の陽ざし、さわがしい蟬の声、私たちは目をさますなり朝の空気を腹いっぱい吸いこんで、ザブンとばかりとびこんで船の底を何度もくぐる。水から顔を出すと遠く岸辺から女中が手まねいて「ごはんですよ、お顔をお洗いにあがってください」と呼んでいる。

この庭には、名木古木が枝美しくその形をきそい、植えこみのしげみをかき分け岩づたいに下りてゆく谷のせせらぎが聞え、そのほの暗い奥にはひやりと濡れた石の上に竹しようぎが一脚、その前にはみどり深い岩ごけと葛かずら。その岩間からは数千の水晶玉をつづった糸しだれの小滝がはるか上から足下の石を打ち叩いて、その清水はたちまち光りの花ととび散って、流れは。そのまま小岩から小岩の肌をなめながら池に流れこむ。春に夏に秋に冬に私はこのSの庭を愛したものだ。

このような少年時代を思うにつけ、もうあのSの庭の池も埋められてしまい、いままた離宮跡がモダンな公園になると聞く。神戸のいかにも神戸らしい豊かさが次第に消えてゆくようできびしくなるしかし、これはいたづらに過去惜しむくりごとと己れを戒めながらも、これだけは申しておきたい。それは東京に住みついでみて、はじめて神戸の天然自然にめぐまれたその天恵を悟ったのであった海に山に、神戸こそは大変にすばらしいところなんですよ。

あなた！

(映画評論家)

■ ショート・ミステリー

ボタンの花

芦川 澄子

え・松本 宏

子供の幼い手は、赤いシャベルで無心に土を掘っている。花壇には、可愛い、春の芽が、たどたどしく頭を出していた。「もうすぐお花が咲くのよ」子供はその日を楽しみに、小さな種を播いたのだった。

六月前のあの出来事さえないかったなら、私も子供と一緒にになって、やわらかい日ざしとたわむれていられたらう。だが、今日の日曜日、夫は朝から警察によばれているのだ。

夫の会社では、三月に人事異動があった。月曜日の晩はそのための送別会があり、夫の帰宅は遅かった。玄関のベルが鳴ったのは、十一時頃だった。ドアをあけた私は、たゞならぬ夫の様子にぎくりとした。夫は外に氣をとられ乍ら、落着きのない声で云った。

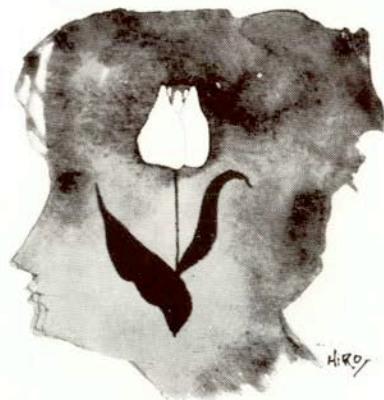
「矢代君が刺されたんだ。今、門のところで。すぐ家にかつぎこんでバトカーに電話したが、ひどい出血だから……」

私の家は細い道路に面した十軒の社宅の中ほどにある矢代の家はこの西の端だった。

「誰に？ どうして刺されたの？」
私は、たゞおろ／＼して夫の顔を見返した。
「わからん。何がなんだか……。だが、刺したのは女だった」

靴を脱ぐ夫の手と、コートの裾に赤暗いもののついているのを見て、私は悲鳴をあげた。夫はよろめくように部屋に入ると、そのまゝ寝台に腰をかけ、空ろな眼をして黙りこんでしまった。まもなくサイレンの音が聞こえ警官が夫を迎えに來たのだった。

矢代は四月から東京に転動することになっていた。統計課の課長という新しい椅子につく彼の栄転を祝って夫も同じ席で盃を交わしたのだった。だが、二次会はそれぞれのグループに分れたため、二人は一緒に帰らなかつた。帰途に夫が矢代の姿を見たのは、社宅への道を曲つてからだだった。街灯の薄灯りが、矢代の家の前辺りにたゞづんでいる二人の人影を照らしていた。夫は少し酔っていた。だから、このはなれた人影を氣にもとめなかつた。だが不意に人影がもつれた。そして異様な男の叫



び声が耳に入ったのだ。夫は走り出した。人影の一方は女だった。その女の手は冷く光るものを見て、夫は夢中でぶつかって行った。だが、その時すでに矢代は刺されていた。足元のうめき声に夫の気がひるんだ。その隙に女は夫の腕をふりはらって逃げてしまったのだ。遺されていた物は、どこの店にも売っているありきたりの登山ナイフだけであった。矢代の傷は深く、家の中に運ばれてからまもなく死んだ。

犯人を見たものは夫以外にいなかった。しかも今日になるまで、夫の証言に概当する女性はいつかからないのだ。矢代を刺したのは夫ではないか？ そんな疑惑が、警察でも社宅の周辺にも薄い煙をあげはじめていた。夫と矢代は同年入社と同僚だった。だが、対照的な性格の二人は平常からさほど親しい仲ではなかった。矢代は派手で話術もうまい。ゴルフのサックを肩にして、部長のおともをする姿が板についているような存在だった。それにひきかえ、夫は無口で、入社以来十年間、同じ椅子に坐り続けているようなひとである。移動の度にポストを変えるのが出世の目安だとすると、夫はまるでそのコースから置き去りにされている感がないでもない。経理の原簿を持たされている夫は、まるで機械のように正確で疎漏のない仕事をした。目立たぬ存在だが、部にとってはかけがえない貴重な人だった。だから部長が手元から離れたがらぬのだ。と夫は苦笑して呟いたことがある。けれども、夫はそれで満足していた。生活に不足ないサラリーを得、家族が健康であれば、転勤のわずらわしさなどない方がよい。それは、あながち瘦せ我慢でもなかったのだ。私達は幸せだった。円い性格の夫には、最初から一度も引越さぬこの社宅の庭に、根着いた植木を眺めるのがなによりのたのしみであることを私はよく知っていた。

けれども、世間の憶測はまるで異った裏面を期待するものなのだ。他人は、夫の寡黙が心底にうっせきした嫉

妬を秘めていたとみなしたがった。その嫉妬が矢代の榮転によって爆発したのだとかんぐりたがった。おまけにその夜、夫は酒を飲んでいたので……。

夫は酒癖のよい方ではなかった。日頃の無口に反撥するように饒舌になる。学生時代には道路に大の字に寝そべて、往行する車にストップをかけるなどという行為をやっていたのけたこともあったらしい。会社に入ってから、一度同僚にからみ、あやうく暴力沙汰になりかけたことがあった。だが、その失態にこりて夫は自重した。酒に飲まれるようになる限界を弁えていて、二度と度を過すようなことはしなかったのだ。だが、こんな事件がおこってみれば、忘れ去ったような過去のたった一度のつまづきも、小さな火となる。火はほじくり出されて煙をたてた。どんなに云いわけをしても、夫には不利であった。

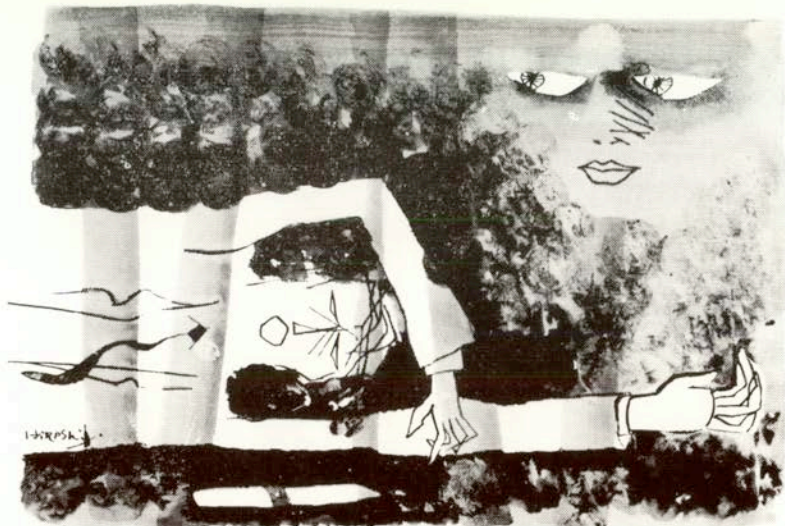
矢代の私行は細かく調べられた。社内の女の子、パールの女給と、想像以上にルーズな彼の女性関係が明るみに出たが、それはただ、矢代の妻の悲しみに複雑な打撃を与えたばかりであった。彼と交渉のあった女達には、それぞれ完全なアリバイがあった。そして、あの夜夫が一度は押えたという犯人は、遂にわからなかったのだ。

「何か特長があったでしょう。思い出して下さいな」こんな言葉が無駄であると知り乍ら、私は悲痛な願をこめて、繰返し夫に云った。

「顔は暗くてわからなかった……背の高い女だった」夫は呆心したように呟くだけであった。

その夜から今日でもう一週間になろうとする。夫は警察によばれていた。参考人という名目だったが、それが容疑者と紙一重の扱いであることを私は察している。そして、私は、社宅の目と耳と口に囲まれて、あからさまに容疑者の妻なのだ。私は子供と二人でひっそりと家にもって暮さねばならなかった。

庭の子供は、無心に土を盛りあげている。玩具の如露



が小さな雨を降りそぐ。

「マコちゃん、そこにはどんなお花が咲くのかしら？」

私は縁側に坐ったまゝ、力ない声で子供に話しかけた

「うん？」

と、子供は振向いて、小さな首を傾げる。

「こゝ？ こゝわね、えゝと……えゝと……、大きな

お花よ。うんと大きな」

「だけど、種を播かなきゃお花は咲かないわ」

「播いたよ。大きなの。こんな大きな種よ。パパのお

机の下に落ちてたの……」

と、子供は指で輪を作って見せた。

あの夜以来、私は夫の部屋を片づけていない。何も手につかぬ投げやりの中から、子供はどんな種を見つけたのだろう。私は、ふらりと庭下駄をつっかけて、子供の傍にしゃがみこんだ。

「掘っちゃいやよ、ママ」

子供は叫んだ。

「だって、変なもの埋めても芽は出ないのよ。何の種だかママがみてあげましょう」

私は指で土を探った。やわらかい泥の中から出て来たのは桃の種らしかった。

「なるほど大きいわね。けどマコちゃん、これは駄目よ」土くれを落して拭くと、種は艶やかに光った。無駄な部分を腐蝕してとり、固い繊維のひねくれた曲線を浮出させて、それは鉋に加工してあったのだ。珍らしい凝った鉋だった。だが、どうしてこんな物が夫の部屋に落ちていたのだろう。あの夜から後に……。私の頭を一筋の光が流れて通った。

夫が警察から戻るのを待ちわびて、私はその鉋を差し出した。

「あなた、これに見覚えございません？」

夫は怪訝な眼をして、鉋を手にとった。

「何だこれは？ どうしたの？」

「あなたのお部屋に落ちてたんです。あの晩以後のことですわ。でも誰もこんな鉋着けていませんし……」

やがて、夫ははっとしたように顔をあげた。

「思い出した。女ともみ合った時、たしかに鉋をもぎとったような気がした。だが、気が顛倒していた上に、鉋も出てこないの、すっかり忘れてしまってた」

「この鉋でしたか？」

「大きな物のように感じたが、はつきりは覚えていない。夢中でオーバーのポケットにでも入れたのだと思う

花 時 計

神戸の
名物料理

青木 重雄

が……」

血痕のついたオーバーを脱ぎずするため、ポケットの中身を取り出した時、この釦も一しょに出て床の上にこぼれたに違いなかった。

「目立つ釦だわ。これをつけていた女の人、探せばわかるかも知れないわ」

夫の眼が、じっと私を見詰めた。

特長のある釦は意外な犯人を知らせた。会社の繊維部に関係のあるデザイナーだった。矢代は三年前に繊維部にいて、彼女と知り合っていた。だが、表面では仕事のつき合の域を出なかった二人の関係が、今まで続いている。

このほど、東京から松屋デパートの横浜店長をしている叔父が三人のお客さんと一緒にやってきたが、「スキヤキを食べたい」といわれて、なぜか私はちよつとまごついた。神戸といえはスキヤキということは戦前から有名なことだが、その有名なはずのスキヤキを食べさせる店の名前がすぐにピンとこないほど、今日の神戸では新しい意味での代表店の存在に乏しすぎるような気がしたからだ。こゝういへばスキヤキ専門の店にまこと悪いが、今一つPRが不足というか、スキヤキそのものがそれほど神戸人には魅力がなくなつたのか知らぬが、ピフテキ店や中華

たとは誰も思わなかったのだ。矢代は今度の転勤を機に女と別れようとした。女は恨んだ。何かそこに金銭上のものがあつたのかも知れない。女は矢代の帰宅を待ち受けて、路上で刺したのだった。

夫への疑惑はようやく晴れた。

私は、釦を掘りおこした土の跡に、チューリップの苗を植えた。そこにはもう可愛い、蕾がふくらんでいる。

子供は赤いシャベルを持って庭をはね廻っている。

「大きな大きなお花が咲くのよ」

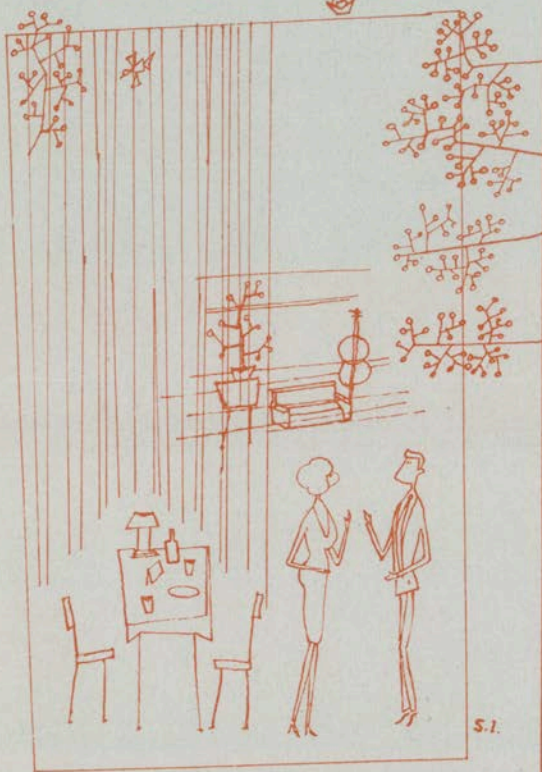
私と夫は微笑み乍らこの庭を眺めている。

(終)

料理店ほどピンとこないのが実感だから仕方がない。結局私は「古めかしい思い出」の命ずるままに「三ツ輪」へ案内した。スキヤキそのものがあまりにも庶民的、家庭的になつたせいもあるが、昔の三ツ輪などは外来の客に大いに持てはやされたものだ。最近神戸肉の輸出がうわさされているが、こうした機会に、専門店はもちろん神戸人が応援して伝統ある「神戸のスキヤキ」をもっとあらゆる意味で現代風に魅力のあるものに仕上げたい気がする。

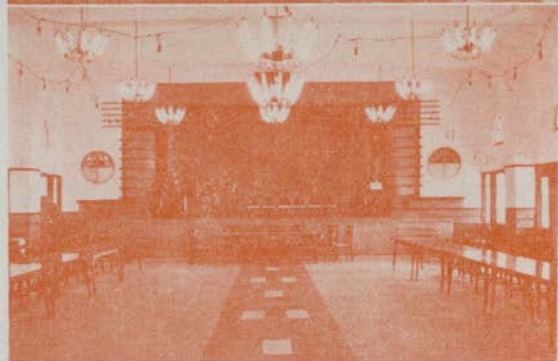
(神戸新聞調査部長
論説委員)

ダンス… 音楽…
春のリズムを… どうぞ…



KITANO CLUB KOBÉ

TEL.23: 2251-3



SPRING DANCE PARTY

●春の楽しいダンスパーティえのお誘い

と き・3月21日(木) 3.00 — 9.00PM

と ころ・摩耶観光ホテル大ホール(写真下)

入場整理券・¥250 EXCELLENT 3BAND

神戸の美しい夜景をながめ、春のリズムで楽しいひとときをおすごしください。花のプリンセスの方々も参加。

国 立 公 園

摩耶観光ホテル

摩耶ケーブル山上駅前 TEL KOBÉ 66 1231-3

●暮らしのプランナー

- ホームプラン預金
- オープン預金
- ホームチェック
〈個人当座〉



神戸銀行



月刊

「神戸っ子」

発行所／神戸市灘区御幸通八丁目九ノ一
昭和三十八年三月一日 発行 毎月一回

神戸国際会館一階 TEL 227-0337 頒価七〇円
(送料20円)



家庭電化と文化の殿堂！

あらゆる電化製品が一堂に集められ、
製品を御自由に手にとってためしてい
ただけるよう展示されています。

どうぞお気軽にお立寄り下さい。

神戸サジョナル電化センター

市電三宮一丁目下車京町筋南え下る

